

第一章…『特務機関の休息日　　』作戦課長とふたり、湯けむりの果てに』

「……はあ……。ちよつち、生き返つたかも」

重厚な日本家屋の玄関をくぐり、仲居さんの案内で通された離れの客室。

畳のい草の香りがふわりと鼻腔をくすぐるその空間に入った瞬間、俺の隣にいた。彼女は、まるで糸が切れた操り人形のように、ドサリと座布団の上へダイブした。

「ん……っ！　やつぱ畳はいいわねえ。ジオフロントの無機質な床とは大違い」

うつ伏せのまま手足をバタバタとさせ、彼女が歓喜の声を上げる。

作戦室で「総員、第一種戦闘配置！」と叫んでいる時の彼女とは別人のようだ。

「ねえ」

不意に、彼女が顔だけを上げてこちらを見た。

紫掛かった美しい黒髪が、さらりと畳に広がる。その隙間から覗く瞳が、いたずらっぽく細められた。

「……何突っ立ってんの？ 早くこっち来て、くつろげば？」

彼女がボンボンと、自分の隣の畳を叩く。

俺は苦笑しながら、持っていた荷物を部屋の隅に置き、彼女の隣に腰を下ろした。

「ん。いい子」

俺が座ると同時に、彼女は芋虫のようにごろんと転がり、俺の太ももに頭を乗せてきた。膝枕、というやつだ。

「重い？」

「……いや、全然」

「ふふ、嘘ばっか。……でも、今はその嘘に甘えとくわ」

彼女は目を閉じ、ふう、と深く息を吐いた。その吐息には、日々の激務のプレッシャーが滲んでいるように感じられた。

「だからね、今日はもう何もしないの。作戦立案も、報告書作成も、あのペンギンの餌やりもナシ！ 今日ほただ……食べて、飲んで、温泉入って、寝る！ 以上！ パーベキな計画でしょ？」

彼女が目を開け、ニッと笑う。

「さあ、そうと決まれば……まずはアレね」

「アレ？」

「決まってるじゃない。これよ、これ」

彼女は上半身を起こすと、俺のバッグを指さした。中には、ぎっしりと詰め込まれた缶ビール山。

「つくうゝゝゝゝッ！ 効くうゝゝゝ！」

空になった缶を高々と掲げ、彼女が叫ぶ。

「ね、飲まないの？」

彼女は既に二本目を手に取りながら、こちらに視線を流した。頬がほんのりと朱に染まり始めている。

「これから温泉ですよ。のぼせますよ」

「かたーい！ そういう堅苦しいのはナシ！ ほら、これ開けて」

彼女は俺の手首を両手で掴み、そのままグイッと自分の方へ引き寄せた。

そして、俺の手にある缶に直接口をつける。

「……ん」

至近距離。

飲み終えると、彼女はペロリと唇を舐め、とろりとした目つきで俺を見上げた。

「……ごちそうさま。いい味だったわ」

—————

一息ついたところで、仲居さんが浴衣を持ってきてくれた。

「さーて、着替えるわよ。温泉温泉♪」

彼女は立ち上がると、躊躇なく着ていた黒のワンピースのファスナーに手を掛けた。

「え、ここで？」

「ん？ 何？」

「いや、あの、俺、外向いてますから」

「あはは！ 何ウブなこと言ってるんだよ。今更でしょ？」

露わになった白い背中には、無数の小さな傷跡が見えた。それは、とてつもなく美しく、神聖なもののように思えた。

「……見すぎ」

振り返りもせず、彼女が言う。

「ほら、手伝って」

彼女は下着姿のまま（黒のシンプルなデザインだった）、浴衣を羽織ると、帯を持ってこちらへ振り返った。

その瞬間、暴力的なまでの質量が目に飛び込んでくる。

「……どこ見てんのよ、エッチ」

彼女はニヤリと笑い、わざとらしく胸を張ってみせた。

「この帯、うまく結べないのよねー。私、こういうの苦手だし。……お願いできる？」

俺は震える手で帯を受け取り、彼女の腰に回した。

帯を回す際、俺の腕が彼女の脇腹に触れた。体温が高く、肌が吸い付くように柔らかい。

「……くすぐりたい」

「動かないでくださいよ」

「だって、変なところ触るんだもん」

「触ってません！」

「うふふ。……ねえ、もっと強く締めていいわよ」

彼女が少しだけ体を預けてくる。

背中に感じる彼女の温もりと重み。髪から漂うシャンプーの香りが、い草の香りと混じり合って、脳を麻痺させていく。

「よし……できました」

「ん！ ちょっと形はいびつだけど……まあ、合格点ね」

彼女は帯の結び目をボンと叩き、満足げに頷いた。

「……ミサトさん」

「ん？」

「胸元、開きすぎじゃないですか？」

「いーのいーの！ どうせ脱ぐんだし、リラクセスリラクセス！」

彼女は手ぬぐいを片手にひらひらと振った。

「さ、行きましょ。貸切風呂、予約してあるんだから」

「……へえ、赤くなってる」

彼女が顔を覗き込んでくる。

大きな胸が、俺の腕にムニユリと押し当てられた。

「期待してる？」

彼女は俺の腕に自分の腕を絡ませた。

「行こっか」

廊下は薄暗く、行灯の明かりが足元を照らしている。

「ねえ」

歩きながら、彼女が小声で囁く。

「……ん？」

「私ね、今日はずーっと、こうしたかったの」

絡めた腕に、きゅっと力が込められる。

「誰の目も気にせず、難しいこと考えずに、ただ……こうして、触れてたかったの」

俺は無言で頷き、絡められた彼女の手を、そっと握り返した。

「……ふふ。パーベキな回答ね」

彼女は満足げに笑い、俺の肩に頭を預けたまま、温泉へと続く渡り廊下を進んでいった。湯けむりの匂いが、徐々に濃くなっていく。夜は、まだ始まったばかりだ。

———
第〇章…『接触、あるいは熱量の暴走』

脱衣所の引き戸を開けた瞬間、白濁とした湯けむりが視界を覆った。
貸切の露天風呂。

「……んんっ、寒っ！早く入りましょ」

俺の背後で、彼女は躊躇いなく浴衣を脱ぎ捨てていた。
タオルで前を隠すことすらせず、堂々と、誇らしげにその身を夜気に晒している。

ちやぼん。

彼女が湯船に身を沈めた。

「はああああ………んっ………」

湯船の方から、とろけるような吐息が漏れた。それは何か深い悦びを含んだ、甘く、粘り気のある響きだった。

「………何してるの？ 風邪引くわよ。早くおいて」

湯けむりの向こうから、彼女が手招きをしている。俺が肩まで浸かると、向かい側にいた彼女が、湯を掻き分けながら近づいてきた。

「………ふふ。いいお湯」

彼女の顔が、すぐ目の前にある。

「……すごい、見てる」

彼女がくすりと笑った。

「好きでしょ？ これ」

彼女は両手で、自分のお湯に浮かぶ胸を下から拗り上げるように持ち上げた。白い肌が盛り上がり、深い谷間がより一層深く刻まれる。

「……どう？」

「……綺麗です」

俺は絞り出すように答えた。

彼女は満足げに目を細め、「んっ」と小さく喉を鳴らした。

「正直でよろしい。……私ね、これ、結構自信あるのよ。メンテナンスなんて全然してないし、重くて肩凝るし、邪魔な時もあるんだけど……」

言いながら、彼女はすうーっと俺の方へ距離を詰めてきた。

湯の中で、彼女の膝が俺の太ももに当たる。

「……熱い目で見てくれるなら、悪くないかなって」

彼女の指先が、お湯の中を泳いで俺の胸板に触れた。

「……こつち、来て」

彼女の強い力で引かれ、俺たちは岩風呂の隅にある、少し浅くなったスペースへ移動した。

彼女が岩盤に背中を預け、脚を開いて座る。
そして、その間に俺を招き入れた。

「……………」

密着。お湯の中で、肌と肌が触れ合う。

彼女の柔らかい太ももが、俺の腰を挟み込む。

そして、あの巨大な胸が、俺の胸に押し付けられた。

「はあ……………っ、ん……………、あつたかい……………」

彼女が俺の首筋に顔を埋め、熱い息を吐きかけた。

「ねえ……………知ってる？ お酒飲むとね、体温上がるの。血行が良くなつて……………敏感になるの」

彼女の手が、俺の背中に回される。

彼女の心臓の音が、押し付けられた胸を通してドクンドクンと伝わってくる。

「……ミサトさん、酔っ払いすぎです」

「うるさい……今は、ただの女よ」

彼女は顔を上げ、濡れた瞳で俺を見つめた。その瞳の奥には、暗く、深い情欲の炎が揺らめいていた。

「……熱くなってる」

彼女の腰が、水中でゆっくりと揺れた。

「……だめ？」

俺はたまらず、彼女の腰に手を回した。

そのまま強く引き寄せると、彼女は「あつ」と短く声を上げ、さらに体を密着させてきた。

「んっ……ふう……っ、もっど……」

彼女が俺の耳朵を甘噛みする。

「きつく……抱きしめて……壊れるくらい……」

俺は彼女の要望に応え、腕に力を込めた。

「あつ……！ んんっ……！ はあつ、はあつ……！」

力が強まるたびに、彼女の口から甘い喘ぎがこぼれる。

「……すごい。おっきい……」

「え？」

「私の胸……体に、びったり」

彼女は夢見心地で呟いた。

「ねえ……洗ってあげる」

不意に、彼女が耳元で囁いた。

「え……」

「背中、流してあげる。……その代わり」

彼女は一度体を離すと、とろりと濁った瞳で俺の全身を舐めるように見下ろした。

「私のここも……たつぷりと、洗ってね？」

彼女が指し示したのは、白濁したお湯に揺れる、その自慢の胸だった。

第〇章…『蜜月、湯の底の触れ合い』

白濁した湯けむりの向こうで、彼女の体は上気し、艶やかに光っていた。

「……ほら、何してんの？ 命令違反よ？」

彼女はぐいっと胸を突き出した。

俺がおずおずと手を伸ばすと、彼女は待ちきれないとばかりに自ら体を寄せてきた。

「んっ……！！ あ……♪」

触れた瞬間、彼女の喉から可愛らしい声が漏れた。

「どう？ 私の……すごい？」

「すごいです……。手から溢れます」

「ふふっ、でしょ？ 自分でも持て余してんのよ、これ」

彼女はケラケラと笑いながら、俺の手の上から自分の手を重ね、ぎゅっと押し付けてきた。

「ねえ、もつと強く。……遠慮しないで、こねくり回していいわよ？」

俺はその言葉に甘え、指に力を込めた。

「あっ……！！ んう……っ！ あはっ、それ……イイっ！」

彼女が大きくのけ反る。岩盤に背中を預け、喉を反らして空を仰ぐ。

「はあ……っ、んん……っ！ もっと……奥まで……っ！」

俺が指先で、尖った頂を弾くように刺激すると、彼女はビクンと体を震わせ、お湯を激しく撥ねさせた。

「ひゃっ……っ！ ん、もお……っ、いきなりそこは……っ！」

彼女の体は正直だ。俺の首に回された腕に力がこもり、さらに深く、密着しようとしてくる。

2

「……ねえ」

不意に、彼女が顔を近づけてきた。

「口でも……洗ってくれない？」

彼女は俺の頭を抱え込み、自分の胸へと押し付けた。

「んんっ……！」

俺は無我夢中で、その柔肉に吸い付いた。

「あぁっ……！ んぐう……っ！ すごい……響くう……っ！」

彼女が高い声を上げ、俺の髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。

「いい……っ、すごくいい……っ。もっど……もっど味わって……」

俺が胸から顔を離すと、今度は彼女から唇を重ねてきた。
食らいつくような、激しいキス。

「んんーっ！ ぶはっ……！」

彼女は肩で息をしながら、恍惚とした表情で俺を見つめる。

「……はあ、はあ……。もう、ダメかも」

彼女はとろんとした目で、俺の耳元に唇を寄せた。

「ここじゃ……。最後までできないでしょ？」

彼女の手が、水中で俺の急所をそつと撫でた。

「……部屋、戻ろ？ ベッドで……。続き、しよ？」

甘く、ねっとりとした誘い。

俺が頷くと、彼女は満足げにニカッと笑った。

「作戦変更。目標、寝室！……ダッシュユで撤収よ！」

俺たちは急いで浴衣を羽織り、もつれるようにして部屋への渡り廊下を駆けていった。夜は、これからが本番だ。

第4章…『回帰本能、あるいは甘い蜜の味』

理性のタガなど、とっくに湯の中に溶けて消えていた。彼女の荒い呼吸が、耳元で反響する。

「ん……あつ、もう……手だけじゃ、やだ……」

彼女が潤んだ瞳で訴えかけてくる。

「……して？」

甘く、掠れた声での命令。

俺は導かれるように、彼女の胸元へと顔を寄せた。

「ひゃうっ……!!」

微かな接触。それだけで、彼女の体がビクンと大きく跳ねた。

「あ、あっ……!! くちびる、あつい……っ!!」

俺は遠慮をやめ、彼女の豊かな膨らみに顔を埋めた。

ちゅ、ぶ……。

舌先で転がし、唇で挟み込む。

「んんーっ！ はあっ、あああっ……！！」

彼女の手が、俺の頭を抱え込んだ。

「いい……っ、すごくいい……っ。もっと……もっと味わって……」

俺は舌を使い、執拗にそこを攻め立てた。

「ああっ！ そこっ！ 吸われるの……っ！ んくうっ……っ！」

彼女の背中が弓なりに反る。

「……………ねえ」

不意に、俺の頭を抱く腕の力が強まった。

「もっと……………強く吸って……………」

「……………っ?」

「赤ちゃんみたいに……………。私の、全部……………飲み干すくらいに……………」

俺は彼女の要望に応え、頬がこけるほど強く吸い上げた。

「ああああっ……………!　すご……………いつ!　吸われてる……………っ、私の……………中身まで……………っ!」

彼女は天井を仰ぎ、口を半開きにして恍惚の表情を浮かべた。

「頭……………おかしくなる……………っ。きもち……………よすぎ……………っ」

彼女は俺の後頭部を撫で回し、時に爪を立て、時に優しく髪を梳く。

「いい子……いい子ね……。いっぱい、飲んで……。私のこと、好きにして……」

「はあつ、はあつ、んんっ……。出る……。っ、何か出ちやいそう……。っ！」

ちゅぽ。

大きな音を立てて口を離すと、そこには唾液とお湯で濡れた、痛々しいほどに充血した痕跡が残っていた。

「……はあ、はあ、はあ……」

彼女は虚ろな目で俺を見下ろした。

「私の味……でした？」

俺は返事をする代わりに、再び彼女の唇を塞いだ。

「……………続きは」

唇を離れた瞬間、彼女が耳元で囁いた。

「……………お布団で、しましょ？ もつと……………いじめてあげるから」

彼女は妖艶に微笑むと、ふらつく足取りで立ち上がった。

第5章…『補完、そして甘美なるまどろみ』

部屋に戻るなり、私たちはもつれるようにして布団の上へと倒れ込んだ。

「……………んっ、ふぁ……………っ！」

浴衣の帯など、とうに解けていた。

彼女は仰向けになり、乱れた黒髪を肩のように畳に広げながら、熱っぽい瞳で俺を見上げた。

「……もう、待てない。……早く」

普段の彼女とは別人のような、無防備で、雌の顔をしたミサトさんがそこにいた。

「……全部、欲しいの。熱……私の奥まで、届けて」

その言葉が引き金だった。

俺は彼女の足の間に体を割り込ませ、その滑らかな太もを肩に担ぎ上げた。

「……いれます」

「ん……っ、来て……！」

先端が触れ、ゆつくりと侵入を開始する。

彼女の中は、溶けるほどに熱く、そして驚くほど柔らかく俺を迎え入れた。

「あ……っ、ああっ……！ 入っ……てくる……っ！」

彼女が大きく背中を反らす。

最奥まで到達し、二人の体が完全に一つになる。

「はあっ、はあっ……！ おっきい……っ、いっぱい、詰まってる……っ！」

彼女は俺の背中に爪を立て、しがみつくように抱きしめてきた。

動き始めると、部屋の中には湿った水音と、二人の荒い呼吸音だけが響き渡った。

「んっ、んあっ！ あっ、あっ、あ……っ！」

俺が腰を打ち付けるたびに、彼女の豊満な胸が激しく揺れ、波打つ。

「そこっ……！！　　いいっ……！！　　深い……っ、んくうっ！」

彼女は快感に翻弄され、首を左右に振って喘ぐ。

俺は彼女の唇を塞ぎ、深いキスをした。

「んんーっ！　　んう……っ！」

口づけの合間から、甘い鼻にかかった声が漏れる。

「……ねえ、見て……私の顔……」

唇を離すと、彼女が潤んだ瞳で訴えかけてきた。

「乱されてる私、見て……っ。恥ずかしいくらい……感じてるの……っ」

彼女は自分の胸を両手で持ち上げ、寄せて、俺に見せつけるようにした。

「ほら……こんなに揺れてる……っ。せいで……っ、ああっ！ 激しいっ！」

俺は彼女の腰を強く掴み、さらに激しく、深く、腰を振った。

「ああっ、だめっ！ すごっ、すごい……っ！ 頭、真っ白になるう……っ！」

「イクっ……！ 私も、連れてって……っ！ 一緒に……っ！」

「ミサトさん……っ！」

「名前……っ！ 呼んで……っ！ もっと……っ、奥に……っ！ ちょーだいっ！」

俺は最後の力を振り絞り、彼女の最奥、子宮の入り口を叩くように深く突き入れた。

「あ、あああああああ——っ！！！」

彼女の体が弓なりになり、中が強く痙攣する。
同時に、俺も限界を迎えた。

ドクンッ！

熱い奔流が、彼女の中に勢いよく放たれる。

「んぐうっ………！ 熱いっ………！ 入って………くるう………っ！」

彼女は白目を剥きかけながら、それでも俺を離すまいと、足と腕で俺を強く拘束した。

嵐が過ぎ去った後。
静寂を取り戻した部屋に、二人の荒い呼吸だけが重なる。

「……………はあ……………、はあ……………。……………すごかった」

彼女が力の抜けた声で呟き、俺の額にある汗を指先で拭ってくれた。

「……………全部、出た？」

「はい。……………全部、ミサトさんの中に」

「……………ふふ。そっか」

彼女は嬉しそうに微笑み、俺の首に腕を回して、チュッと軽いキスをした。

「気持ちよかった。……………最高だったわ」

「俺もです。……………今までで一番、幸せでした」

俺がゆっくりと体を離そうとすると、彼女の中からの「名残」が、どろりと溢れ出し、シートを汚した。

「……あーあ。シート、汚しちゃった」

「明日、クリーニング代請求されますね」

「いいわよ、それくらい。……必要経費、つてことで」

彼女はけらけらと笑い、俺を隣に引き寄せた。

「ねえ」

腕枕をした俺の胸元で、彼女が呟く。

「ん？」

「……ありがとね」

「俺の方こそ。……連れてきてくれて、ありがとうございました」

「……ううん。私が、一緒にいたかっただけ」

彼女は俺の胸にキスを落とし、さらに強く抱きついてきた。

「明日になれば、また……うるさい日常が待ってる。使徒も来るし、会議もあるし、冷蔵庫にはビールしかないし」

「……最後のは補充すればいいじゃないですか」

「あはは、そうね。……でも、今は」

彼女は顔を上げ、俺の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「今は、このまま……こうしていたい」

俺は彼女の肩を抱き寄せ、おでこにキスをした。

「…………おやすみなさい、ミサトさん」

彼女は猫のように目を細め、俺の匂いを吸い込むように深呼吸をした。

「ん……。おやすみ」

俺は彼女を抱きしめたまま、深い眠りへと落ちていった。

エピローグ…『夜明け、そして名残りの甘い罰』

障子の向こう側が、わずかに朱に染まり始めていた。

俺は、昨夜の激しい情事の余韻に包まれたまま、彼女の匂いの中で目覚めた。

腕の中にいるミサトさんは、まだ深い眠りの中だ。

俺はそっと、彼女の頬を撫でた。

すると、彼女が「ん……。」と小さな甘い声を上げ、猫のように身をよじった。

その動きで、彼女の柔らかな胸が、俺の腕にムニユリと押し付けられる。

「……………ふぁ……………」

彼女はゆっくりと目を開けた。

「……………おはよう」

掠れた、甘い声。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「うん……………。久しぶりに、ぐっすり。…………隣だから、かな」

彼女は手を伸ばし、俺の唇に触れた。

「昨夜のこと……………覚えてる？」

俺は答えずに、彼女の頭を抱き寄せ、優しく、しかし深くキスをした。

「んん……ちゅ……」

彼女は舌を絡ませ、さらにキスを深めてくる。

「……ダメよ、もう時間。チェックアウト、そんなにゆっくりできない」

唇を離れた瞬間、彼女が自制するように言った。

彼女の腰が、俺の下半身にゆっくりと擦り付けられているからだ。

「……でも、体が」

「うるさいっ。……でも、まあ」

彼女はニヤリと笑うと、シーツを捲り上げ、その自慢の白い胸を朝の光に晒した。

「朝の挨拶くらいは、いいわよね？」

俺は昨夜以上に食欲に、その熱い先端を舌で弄んだ。

「ひあつ！ んぐうつ……！ や、やっぱり朝は……っ、すごい……っ」

彼女の喘ぎ声は、夜の情事の時よりも、さらに粘着質で甘い。

じゅぶ、じゅる……。

吸い上げる音。俺は、彼女が昨夜求めたように、「赤ちゃんのように」強く、深く吸い上げた。

「ああつ！ んんーっ！ はあつ……！ 全身、痺れる……っ、そこお……っ！」

彼女は自分の太ももで俺の頭を挟み込み、圧力を加える。

「ねえ……っ、全部が……私を、侵食する……っ。気持ち、よすぎて、もう……っ」
恍惚の表情。

「まだ……っ、まだイかなくて、よかったわ……っ。朝のこれは、特別……っ！」

俺が胸から顔を離すと、彼女は激しく息を乱しながら、その充血した胸を俺に押し付けてきた。

「はあ、はあ、はあ……っ。……もう、やめて」

彼女は目を閉じ、小さく呟く。

俺は彼女の言葉に従い、それ以上の行為は控え、ただ優しく抱きしめた。

「……………ねえ」

ミサトさんが、俺の耳元で囁く。

「……………あと、五分だけ。こうしていて？」

「はい」

俺たちは最後の五分間を、熱い抱擁の中で過ごした。

「……………私、帰ったらまた、いつもの作戦課長に戻っちゃおう。冷たい顔して、紅茶片手に、会議室で怒鳴り散らして。……………でも」

彼女は顔を上げ、俺の瞳をじっと見つめた。

「……………前だけは、こうしていい？」

俺は、彼女の濡れた唇に再びキスを落とす。

「いつだって、ミサトさんはミサトさんです。……俺の前では、いつでも甘えてください」
「……ん」

彼女は満足げに微笑むと、俺の唇を吸うように、チュツと何度も軽いキスを繰り返した。

「ご褒美」

「……また、連れてきてくれますか？」

「もちろんですよ。……また、パーペキな作戦を立ててあげる」

彼女はそう言うのと、いつもの作戦課長の顔に戻り、布団から飛び出した。

カーテンを開ける。強い朝の光が部屋に差し込み、二人の体を照らし出す。

「さ。今日は作戦名『緊急撤収』よ。モタモタしない！」

彼女はそう言いながら、俺の頬に飛んで別れのキスをした。
そして、その瞳は、すでに次の「使徒」との戦いを見据えているようだった。

く完く